
IS-宿命の黒き翼

高嶺ミネタカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS - 宿命の黒き翼

【Nコード】

N9069W

【作者名】

高嶺ミネタカ

【あらすじ】

12月。他の高校生より一足早い冬休みが始まり、ようやく学園の喧騒から逃れた一夏。のんびりしながら平穏無事にいたいと願いながらすごしていたそんな彼にまた事件が降りかかることになるうとは、この時の一夏は露ほども思っていなかったのだった。

初めまして。稚拙な文章ですがなにとぞお付き合いください。この話の時間軸は本編第7巻の後で、原作の設定をあまり崩さない方

針でやっていこうと思ってます（とか言っておきながらオリジナル
ISとか言ってるので原作の設定を後々無視してしまいそうです・
・・）。誤字・脱字、ご意見、ご感想がありましたらぜひよろしく
お願いいたします。そんなわけですが、どうか暖かい目で見守
ってください。

プロローグ

——とある施設。

夜でもないのにも関わらず廊下は暗く、ただただ暗闇が続いていた。そこに一人の女性の足音が響く。美しい金髪をなびかせながら優雅に歩く彼女の足取りは、どこかこの暗闇に閉ざされた空間を楽しむかのような感じすら受け取れた。

やがてその女性はある扉の前でその足を止め、中に入ってしまった。

そこには広大な空間がひろがっていた。国が保有する国立競技場が丸々1個入りそうなほどの広さがあるに違いないだろう。そして何より目に留まるのは——何十機にも及ぶISの数々だった。その数といったら一国家の持つISの機体数の比ではない。余裕で戦争を起こし何力国もの国を侵略できるクラスの数である。

女性はそのISの群れの中を進み、中心にいる一人の少女に声をかけた。

「調子はどうかしら？エム」

「……」

エムと呼ばれた少女——織斑マド力は声をかけてきた女性——スコールに一瞥をくれ、その目はマド力が握っていたナイフに戻った。顔には自分で傷つけたのであるうか、頬から血が流れていた。

「あなた、今度は自分の体中を傷つけていたの？活性化治療のナノマシンがあるからとはいえ、そんなことはもう少し自重しなさい」
見るとマド力は顔だけでなく腕、足に多数の切り傷があった。しかしマド力はなぜだか嬉しそうな笑みを浮かべていた。ただし、それは普通の人間が見たらぞつとするような笑顔だった。

そんな様子を見たスコールは微笑みながら声を掛けた。

「……まあ偶然とはいえ篠ノ之束の移動式ラボの発見及び強襲の成功——それに」

目を周囲のISに移しながら言った。

「これだけの無人機、未発表のコア、何よりもISに関するデータを強奪できたのだからねえ、嬉しいことこの上ないでしょう」

話は数日遡る。IS強奪作戦の命を受けていたマド力だったが、途中で多数のISの反応をキャッチした。それをスコールに報告した結果、その施設を強襲することになったのだが、あるうことかその施設は篠ノ之束のラボだったのだ。さらに驚くべきことに、たった1時間弱で束のラボを制圧できてしまった。直後に束と助手と思われる少女の失踪が確認され、ラボ内にあったIS及びISコア、それにラボ内のデータは『亡国機業』ファントム・タスクの手に落ちた。もちろん世界にこのニュースは一字一句として報道されていない。

あまりにも簡単にあの篠ノ之束が陥落したことに違和感を覚え、束が何か罠を張っているのではないかと考えるスコールではあったが、同時に計画の思いがけないかつ超速的な進展は喜ばしいことだった。これでもなく計画が動かせる。

「スコール」

突然マド力から声がかかる。

「…あなたの言いたいことは解るわ。本当のところはだめと聞いたけど…いいでしょう。今回の功績に免じて、あなたの身勝手な行動を一回許してあげましょう」

その言葉を聞いたマド力は残忍な喜びで体が震え始めた。

「…ただし宣戦布告程度にしなさい。どういう手段で布告するかなんていちいち訊かないけど、お楽しみは一番最後にとっておくものよ。——それとなるべく殺しはやめて頂戴ね」

そっぴい残してスコールは去っていった。残ったマド力は足元に落ちていいる一枚の写真を見つめる。そこには織斑千冬と一夏が写っていた。

「ねえさん…」

復讐は蜜より甘いという。これからチェスのゲームが始まるのだ。ただし相手はキングにポーン一体。ポーンなど獲らなくてもチェッ

クメイトはできるが、それでは全くもってつまらない。最愛の者を奪われた瞬間の人間の顔を、それも織斑千冬ねえさんの顔をまず見たい。復讐いムはそこから本格的に始まるといっている。キング一体を相手にとったゲームが。

そのためにも――

「織斑一夏――」

不意に手に持っていたナイフを写真の上に落とす。ストン、という音を立ててナイフは一夏の額に突き刺さった。そしてマドカから邪悪な笑みが零れたのであった。

その時、自宅で寝ていた織斑一夏ががばっと目を覚ました。

紅色のクリスマス（１）

日本時間１２月１９日・日曜日。時計は午前４時１９分を指していた。冬休みを迎えて２日目、ＩＳ学園１年生の織斑一夏は悪夢によつて早々に目覚めてしまった。全身に冷や汗をかいている。まだ外は暗い。一夏は立ち上がって自室から１２月の冷気で底冷えする廊下に出た。

ここはＩＳ学園ではなく、一夏の自宅だった。一夏は冬休みが始まった昨日に学園を引き払って帰省してしまっていた。理由は、正直特にこれといったことはなかった。強いて言うのであれば、これであまり気疲れしなくてすむということがある。さすがに慣れてきたとはいえ、自分以外全員女子なのだ。やっぱり普段からさまざまなことに気を使って生活しなくてはならないし、常日頃からそういう風にしていれば多少なりとも精神的に疲れがたまるといふものだ。正直なことを言ってしまうえば年末年始くらい平和に過ごしたい。

そんな訳で帰省しようとしたのだが、いつもの専用機持ち組のメンバーに計画が早速ばれてしまい、この理由を話したところ、なぜか冷やかな目で見られた。うーむ、てつきり納得してくれるとばかり思っていたんだが。しかしよくよく考えてみたら以前年末年始をみんなで過ごす約束をしていたことを思い出し、それを固く約束したところどうにか全員引き下がってくれた。

それにしても、さっきの夢の内容が頭にまだ鮮明に残っている。一夏はあまりにも生々しく残っている夢の残像をたどってみた。

あの中で一夏は広大な空間の中に立っていて、見渡す限りに広い空間には何体ものＩＳがいた。その中の数機は一夏の見たことのあったＩＳだった。名前はゴーレム？。以前専用機持ちのタッグマツチトーナメントで交戦した対ＩＳ用のＩＳだった。それがあれだけいるとなると……５体のみのときですら学園全体に甚大な被害をもたら

したというのに。

他にも見たことのないISの数々を見て驚きを隠せなかったが、しかし真ん中に立っていた人物——織斑マド力を見てそれまで自分が見ていたISのことなどすっかり頭から吹き飛んでしまった。今でも忘れはしない、千冬姉と瓜二つの顔をした少女。誕生日に銃口を向けられた時の記憶が蘇る。その度に今でも震えが止まらなくなるときがある。そしてマド力の足元には一枚の写真があった。千冬姉と自分が写ってる写真。なぜそんな写真をマド力が持っているのかは判らなかった。だが、突然写真の自分の額にナイフが刺さった瞬間、恐怖に駆られた。そして飛び起き、初めてそれが夢だと判った。

しかしあれは本当にただの夢だったのか？あまりにも鮮明すぎてただの夢には思えなくなってくる。だが自分は超能力者でもなんでもない。あの自分もどこだかわからない場所、しかも目の前にいる織斑マド力に気づかれずにあんな所に侵入できるわけがない。そんなことできるんだったらその手の道で生きていけるんじゃないか。ばかばかしい。

きつとあの事件をまだ引きずっているんじゃないのか。確かに一度でも自分に銃を向けられる（しかも発砲までされた）ことがあればそれはトラウマになるだろう。でもいつまでもそんな風に考えてはいられない。自分の身くらい自分で守らなくては。最初は千冬姉、次はラウラ。次は誰に守ってもらうつもりだ？しゃんとしろ、一夏。お前が生きるべきは夢の中じゃなくて今ある現実だろうが。

両手で自分の頬を叩く。

そんなことで自分を鼓舞しながら一階のキッチンに下りてきた一夏はコップに水を注ぎ、ゆっくり飲んだ。昔千冬姉から教わった、自分の感情を落ち着ける方法。少しずつ気持ちも落ち着いてきたところで、また睡魔が襲い掛かってきた。

「もう少し寝るか…」

そう言いながら二階へあがり、再びベッドにもぐった。
やがて今度は寝すぎて、10時頃、弾からの遅いモーニングコールで目を覚ますことになる。その時目覚めた一夏の記憶では、未明の夢の内容などすでにおぼろげになっていたのであった。

「おい、こっちだ一夏」

「すまん、遅くなった」

「珍しいよな、お前が寝坊だなんて」

今日一夏は久しぶりに弾と数馬と遊ぶ約束を交わしていたのだが、集合時間から30分も遅刻してしまっていた。理由は二度寝のせいだった。朝は弾の電話で起き、時計を見たらすでに10時。そう、約束の時間ちようどに起きてしまったのだ。寝ぼけた頭であわてて支度を家を出てきたため、当然朝食など食べてはいない。

「何でまた寝坊なんてしたのさ」と数馬。

「何でだっけなー、まだ夜が明けないうちに何かヤな夢を見たんだよ。そんでいったん起きてもつかい寝ちまったら弾から電話がかかってくるまで起きれなかったっていう訳だよ」

「ヤな夢ってどんな夢だよ」

「そう言われれば、どんな夢だったっけ？」

「俺に聞くなよ」

突然訊かれて両手を挙げて答える数馬。

「あーやめとけ数馬。一夏の悪夢の中には俺たちにとっちゃスーパ―ハッピーな夢も含まれるから」

「ああ、かわいい子に囲まれて青春を送ったりだとか？」

「いやお前ら、実際ウチの環境に放り込まれてみるっての。最初のころなんてホントにしんどかったんだから」

「あ、そういえばこいつにとっちゃそれはもう夢じゃなくて現実に

なってるんだったな。そういえば聞けよ、数馬。こいつたらIS
学園の学園祭の時よー」

「おい弾、それをしゃべるな」

そうして一夏、弾、数馬の旧友トリオの会話が進んでゆく。

「ところでさ一夏」

弾が声を掛けた。

「なんだよ」

「…その頭、どうした？」

見ると一夏の髪の毛はあらゆる方向にピンと飛び出している。寝癖
を直してこなかったのだ。

「朝寝坊したし時間がなかった…」

「おー、これは珍しいぞ。あの一夏君の珍しい寝癖姿だ」

「写真撮ったら蘭に売れるかもしれないな…」

と、数馬と弾。

「おいおい勘弁してくれ…」

と疲れ気味に一夏が漏らす。

「冗談だっつーの。まあアレだろ？日常の疲れがここにきてどばー
っと出てきたんだろ」

「そんじゃ今日は久々に遊びまくるか！！」

こうして弾と数馬が一夏をリードしていく。

「おう」

そう返事をしつつ、いい友人を持ったもんだと一夏は思った。

そんな三人の姿をビルの柱の陰から見つめる者がいた。

ラウラである。

三人が北繁華街の方に向かっていくのを見て、携帯を取り出して電
話を掛け始めた。

「この日は中学時代のやつらと会っただけなんだよっっ！……やましいことは断じてないから！」

そういうとラウラはぴたっと止まり——ようやく部分展開を解いた。

「……その話… 本当なのだな？」

「ホントだホント！！神に誓ってもいい！！」

「そういつて実はその同級生が女とかいうオチは無いだろうな？」

「ぜっつつつたに無いつつつつっ！！！！！」

「そうか、そこまで言うなら……いいだろう。だが次の機会には付き合ってもらっぞ」

「お…おっ…」

「浮気などがばれたら… どうか解っているな？」

「だから無いって！」

そこまで言っでラウラは部屋から出て行った。一夏はため息をつき、その場に座り込んでしまった。

同じ頃、ラウラ以外の専用機持ち組み——箒、セシリア、鈴、シヤルロットはやはり一夏の部屋を指して歩いていた。無論、冬休み最初の週末を二人きりで過ごそうという魂胆だ。土曜日に一夏が帰省することはすでに解っていたので、そうすると日曜日に誘うのは当然だった。

そしてやはり当然だったのだが、一夏の部屋に向かう途中に四人がばったり出くわした。

「ああっ！」

「なっ…！」

「あなたたち…！」

「何でここにいるのよ！」

シヤルロット、箒、セシリア、鈴が声を上げ、そして全員が全員の考えていることを瞬時に理解した。次の瞬間には一夏の部屋を指してデッドヒートが繰り広げられていた。

「邪魔をするな、セシリア！」

「箒さんこそ！」

「あんたたちみんなときなさい！！」

「うつつ、何でいつもこうタイミングが悪いかなあ……」

時折他の生徒にぶつかりそうになりながら四人は一年生寮を駆け抜けていく。やがて一夏の部屋の前の廊下に差し掛かる最後の曲がり角を曲がった直後、四人の視界に今まさに一夏の部屋のドアノブに手を掛けようとしている一人の女子生徒——更識簪がいた。それを見るないなや、四人が同時に叫んだ。

「……待て——っ！！！！」

「えっ……？」

簪が驚いてこちらに突っ込んでくる四人に目をやった瞬間、一夏の部屋からラウラが出てきた。

「……え……」

ラウラ以外一同の気の抜けた声。次の瞬間には走りこんできた四人が折り重なるようにしてその場に倒れこんだ。

「どうした、お前たち」

ラウラが声を掛けた。立ち上がりながら最初に答えたのは鈴だった。
「どうしたってねえ……あんたこそ何でここにいるのよー！」

「フン、冬休み最初の休日くらい夫婦で過ごすべきだと考え誘ったのだが、どうもあいつには先客がいるらしい。断られてしまった」
それを聞きがつくりとうなだれる一同。と同時にラウラが言う。

「……その様子をみるとお前たちも似たようなことを考えていたようだな。しかし残念だったな。人の嫁とそうやすやすと抜け駆けさせるわけがないだろう」

「それを言うならあなたも……」

簪が言った。

「そうですね！！あなたこそまさに抜け駆けをしてるではありませんせんか！！」

「だ、大体一夏はお前のものではない！」

「ラウラってやっぱり放っておいたら危ないなあ…」

セシリア、箒、シャルロットが続く。そこでふと鈴がつばやいた。

「…ん？先客？ラウラ、あんたさっき『先客』って言ったわよね？」

「ああ、確かに言ったが中学の同級生——」

しかし「言った」の部分を聞くや否や、鈴は一夏の部屋に突入していった。

「い——ちか————っ！——」

「どうということだっ、説明しろっ！——」

「僕も聞いてないよっ！——」

「詳細の説明を求めますわっ！——」

箒、シャルロット、セシリアも続いて入っていった。そんな様子をラウラの話を最後まで聞いていた簪は見つめていた。

（中学の同級生…それなら…仕方ない…）

でも、その同級生が女子なのではないかとも思ってしまう。いいやしかし仮にそうだとしても相手はあの唐変木の中の唐変木、織斑一夏なのである。ちょっとやそつとのことでそこらあたりの女子になびかないだろう。

いや、でももし…？ああやってなびかないのは実は同級生が彼女だったりするからではないのだろうか…？ああ、もしそうだったらどうしよう。いや、でも…。

そんな無限ループに陥りながら簪は自室に戻っていった。…のだが、途中においてあった観葉植物にぶつかり、なぜかそれに謝っていた。そんな様子を見ていたラウラは考えていた。

（フム。あいつも一夏の事が好きなようだ。一夏め、また女を口説くとは…嫁の風上にも置けんな）

これは少しお灸をすえないといかな、と決めたラウラもまた一夏の部屋に入ってしまった。

一夏は突然の状況に困惑していた。ラウラの説得が終わって一息ついたと思ったらまた急にいつものガールズメンバーに取り囲まれて

しまった。しかも全員が全員、次の日曜日の説明をしるという。だから中学の旧友と遊びに行くだけなんだって。そんな自由すら俺には認められないのだろうか。

一通り事情を説明してもなかなか満足いった様子ではなかった。

「…あんだ、嘘ついてないでしょうね」

鈴が不審がりながら聞いてくる。

「なぜ嘘をつく必要がある」

「そんな事言つて友達という名の女の子でもをはべらせてるんじゃないの？」

「んな訳あるかつ!!」

シャルロットにまで言われてしまう一夏。今回の件では相当信用されてないみたいだ…。何でだろう。

……………。

不気味な沈黙が流れる。女子たちの非難の視線が一夏に突き刺さっていた。そこに――

「織斑、いるか？帰省の手続きで学生課が――お前たち」

一夏の部屋の空気が一瞬にして凍った。入ってきたのは千冬姉だった。

「またいたのか。懲りないやつらだ。織斑、今度はどんな騒ぎを起こしてくれるつもりだ？」

「別に俺が起こしてるわけじゃ――」

「それより、篠ノ之、オルコット、鳳、デュノア。さっきお前らがキャノンボール・ファストの如く廊下を駆けていたと耳にした」

それを言われてぎくりとする四人。何でそんなことをしたのかと不思議がる一夏。たぶん一生かかっても解らないと思われる。

「…今回は大目に見てやるが、次またこんなことを耳にするようだったら――その時はお前たちにグラウンドを満足するまで走らせてやるっ」

「………すいません………」

「ところで織斑、帰省の件で学生課から話があるそうだ。私と共に

来い」

「解りました」

ようやくこの場から開放される。このときの一夏は千冬姉のことを救世主のように思ったのであった。

「…そういえばお前は帰省して早々中学の時の連中と遊ぶらしいな。男同士で？」

「え…はい」

不意にそんな質問をされて一夏は若干受け答えに困った。

「フム。ならそいつらと女の二、三人引っ掛けてくればどうだ？彼女さえ作ってしまえばこいつらも寄りつかんだろう」

突然とんでもないことを言い出す姉。それに反応した女子からは殺気が放たれていた。前言撤回。この人は救世主ではなかった。

「ちよっ…何馬鹿な事いつてんだよ千冬姉！！」

「フツ…冗談だ」

そんな真つ黒な冗談に付き合っていたら本気で寿命が縮みそうだ。お願いだからやめてほしい。そして周りの女子の皆さん。これは誤解です。

「さて、馬鹿な話はこちらまでにするとしよう。織斑、ついて来い。残りのやつらも部屋から出ろ」

全員部屋からゾロゾロと出てくる。死んだ魚の目をしている五人を残して千冬と一夏は歩いていつてしまった。

そんな二人の背中を見ながら鈴がポツリとつぶやく。

「これは監視が必要ね」

他の四人もコクリと頷く。こうして一夏監視団が結成されたのだった。

紅色のクリスマス(2)

そついう訳で女子組に監視されていることを全く知らないまま、一夏達は繁華街を進んでゆく。そんな一夏達からはばれないように箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラはばらばらになって、しかし必ず一夏が目視できる場所にいた。一夏が他の女子たちと少しでもつるむのであればすぐに制裁を下す準備もできている。最初はどうにかして尻尾をつかんでやろうと意気込んでいたのだったが、ところが女子組の予想(正直ただ考えすぎなだけなのだが)とは裏腹に特に何事もなく時間は過ぎていった。こうなると監視している側からしてみれば一体何のためにこんな時間を割いているのかとだんだん焦りが生じてくるのであった。

「ちよつと鈴さん？一夏さんはいつも通りですわよ！？このままでは危険を冒してまで追跡する必要性が出てきませんわ！」

「そうだな。どうするんだ、お前が言い出して始めたんだぞ？」

「フム、このままでは時間の無駄遣いだな」

セシリア、箒、ラウラが携帯電話の向こうでこね始めていた。実際に監視を始めてから2時間、何も問題になるようなことは起きていなかった。

「あー、もう仕方ないでしょ！！それとも何よ、あんた達はいつが他の女子とつるんでるところを見ちゃってもなんとも思わないわけ！？」

「いやそれは確かにやだけど…でもこのままだと埒が明かないよ？」若干ムキになって反発する鈴。シャルロットも口を開くが、その声にはどこか疲れがにじみ出ている。そんなガールズメンバーをよそに一夏達はフードコートの一角に座っていた。無論、昼食をとるためである。それを見つけた箒が言う。

「おい、一夏達は昼食をとるようだぞ」

「ちようどいいわ。私達も昼食を兼ねて一旦作戦会議でもしましょ

う」

そういう鈴の一言で一夏達とは正反対に位置するテーブルに女子達は集まった。よっぱど注意深く探されなければ見つからない位置であると同時に、女子の方からは意識しているので一夏達の様子がいかりと伺えるという絶好の場所だった。五人は席に着くなり、テーブルに突っ伏したり、イスにもたれかかりたりしていた。

「…で？どうするんだ、この後は？」

イスにもたれていたラウラが言った。

「それをこれから話し合っくんじゃない…」

力無さげに鈴が答える。

「と、とりあえずごはんにしようよ？ここ何でも売ってるみたいだし」

「そうだな…」

「私もそうしますわ…」

こうして五人はそれぞれ昼ごはんを買ってきた。箸はうどん、セシリアはサンドイッチ、鈴はラーメン、シャルロットはパスタ、ラウラはホットドッグだった。

「……………」

全員、無言のまま食事を続けていく。しばらくして沈黙を破ったのは鈴だった。

「…正直悪かったと思ってるわよ。でもなんだかすごい胸騒ぎがしてさあ——」

「まあ教官にああ言われれば気になってしまふのも解る」

「実際、織斑先生が言う冗談って冗談に聞こえないからね」

「…織斑先生は実際のところ一夏さんのことをどう思っているのかしら？」

「うつむ、実際問題としてそれは気になるな」

全員考えていた。織斑先生は一夏と自分達を近づけまいとしているのではないかと。今年の臨海学校の時といい、先日といい、自分達と一夏の間になんだか距離を置かされているように感じてしまっ

いたのだった。

そんなこんなでそれぞれが考え事にふけっていたのだが、ふと顔を上げた篤が急に固まった。

「——まあ実際のところあいつは今日もいつも通りって訳よね。それだつたらたぶん今日も——」

と鈴が話し始めたのだが、篤が突然右手を上げて話をさえぎった。鈴は篤の顔を見たが、篤は全く別の方向を見ている。鈴がその視線の先を追う。すると鈴も固まったので他の三人も二人の視線の先を見た。

そこにはいつの間だろう、更識楯無にがんじがらめにされている一夏がいた。楯無の隣には顔をうつむかせて若干顔を赤らめている簀。他の男子二人は目の前に広がる光景をうらやましそうに見ていた。

「……………」

それまで多少なりとも動いていた女子組の昼食の手はぴたりと止まり、五人は絶対零度の視線で一夏を見ていた。その目に生気は感じ取れない。全員がすぐにでもISを展開して急襲できるようにしていた。

そこにいかにもという感じの男のグループが近寄って来た。

「なあなあ、あその子たちすげーかわいいぜ」

「へえー、いいじゃんいいじゃん」

「ねえ、君達ヒマ？良かったら——」

そこまで言って男達は固まった。振り返った女子五人の目には光がなく、そこにはただ殺意のみが宿っていた。尋常でない空気に圧倒された男達はその場に立ち竦んでしまった。

「あー…えっと…」

「す、すみませんでしたーっ！」

そう言ってそそくさどこかへ逃げてしまった。そして女子はまた一夏の方に振り返る。すると偶然なのか、はたまた最初から気づかれていたのか——こっちを振り返った楯無と視線があった。にや

りと不敵な笑みを浮かべてくる楯無。

（（（（（うつ…））））））

不覚にも全員ひるんでしまい、一瞬にして先ほどまでの殺意は失われてしまった。

（い…一夏さんも少しは抵抗しなさい！）

（…あの人が相手だと分が悪いな…どうしたものか…）

（何よ！あの女のどこが良いってのよ…！くう…一夏のやつ…！）

（楯無先輩も放って置いたら絶対まずいよね…何とかしないと…）

（あの女め、人の嫁をたぶらかすとは…やってくれる…！）

セシリア、箒、鈴、シャルロット、ラウラはISやその他においても実力では楯無の方が上だと嫌でも解らされていたが、一夏の事に関してはライバル視——もとい敵視していた。

どうやったら楯無を追い越せるのか——全員がそんなことを考えているうちにいつの間にか更識姉妹は一夏達のテーブルから離れていった。二人とも両手に紙袋を提げていた。どうやら二人で買い物に来ていたところ、偶然にも一夏を発見したらしい。そして女子組が見たのは疲れきったようにテーブルに突っ伏した一夏の姿だった。三人で何か言葉を交わした後、弾と数馬は一夏の肩に手を置いていた。どうやら嫉妬しつつも同情しているらしい。その姿を見て女子五人は安堵してため息をついたのだった。

「ふう…とりあえず難を逃れたな」

「ある意味さすが一夏つてとこかしらね」

視線をようやく一夏から離し、昼食を再開した箒と鈴が言った。

「…何か心臓に悪いよね。毎回楯無先輩って大胆だから…」

自分にもそんな度胸があればと思いいながら言うシャルロット。そんなことを言いつつも過去に何度か大胆なことをしているのだが。

「とりあえずあのお二人方とは前もって約束していた訳ではなさそうでしたわね」

「当然だ。仮に試してみろ、ばれたその日があいつの命日だ」
セシリアとラウラが言った。

「さてと、じゃあみんなどうする？とりあえず一夏はいつも通りだし、考えたら連れのメンバーがメンバーだからあたしはたぶん特に何も起きないと思うわ。そうなればわざわざ監視する必要もないと思うし」

昼食を食べ終わり、一息ついたところで鈴が言った。

「そうか。私はもう少し一夏の後をつけるとしよう」

そう言うラウラに全員驚いていた。ラウラが続ける。

「よく考えてみたら私は私がない時にあいつが普段何をしているかあまり知らない。ちょうどいい機会だし一部でも知っておこうと思ってな」

「……！」「……」

全員何かピンと来たようだった。

（そう言われてみれば……私も普段の一夏をよく知らないかもしれないかも……。……。ラウラに言われるまで気づかないとは……不覚だ）

（た、確かにわたくしも一夏さんの日常を知らないですわね……。ラウラさんに先に言われてしまいましたけど、ここはわたくしも……）

（一夏の私生活か……もしつけてるのがばれたら嫌われちゃうかなあ……で、でも少しくらいなら大丈夫だよな……？）

（うつーっ、あたしの馬鹿馬鹿っ！何が『何も起きない』よー！他の女よりこいつらの方がよっぽど危ないじゃない！！ああー、どうしようー）

箒、セシリア、シャルロット、鈴がそれぞれ頭を悩ましていた。そして反対側の席では一夏達が立ち上がったてこの場を去ろうとしていた。

「む、一夏も動いたか。では先に失礼する」

そう言っ立ち上がるラウラを他の四人が慌てて抑える。

「ラ、ラウラ！僕も行くよー！！」

「わ、わたくしも一緒にしますわー！！」

「そ、そうだな、私も行くでしょう。数が多ければ不測の事態にも

対処しやすいからな」

「あたしもいいいい行くわよ!!」

こうして一夏の尾行はまだまだ続くのであった。

その後一夏達はいろいろと回った。まずは衣類などを見た。一夏は新しいジーンズとトップスを買った。深い紺のジーンズと赤のパターンのトップスだった。その後は弾と数馬に付き合って楽器店へ。何やら弾が新しいベースを欲しがってるようだったが、「一番気に入った!」というベースの値札を見たら何と「380000」という数字が並んでいた。当然買える訳もないのでただ眺めていただけだったのだが、弾は何か決意したようで、「いつか俺のものにする宣言」をしていた。夢に向かって努力するのは素晴らしいことだと思う。でも音楽はやっぱりお金がかかる。

その後はCDショップ、雑貨店、本屋、ゲームセンターと、あちこち回った。やがて空が真っ暗になったところで一夏たちは帰ることにした。

「んじゃまたな」

一夏は駅前で弾と数馬と別れることにした。二人はバスで帰るらしい。

「おう。次はクリスマスパーティーか?楽しみにしてるぜ」

「ちゃんと交換用のプレゼント買っとけよな」

「あつ……!」

弾と数馬に言われて一夏は気づいた。まだクリスマス用のプレゼントを買っていない。

「その様子だとまだ買ってないな?早く買っとけよ、後で焦るから」

「一夏君のセンスに乞うご期待だな」

弾と数馬に言われる一夏。

「よせよ、ハードルを上げるなっつーの」

そう言つて二人と別れた。

誕生日にシャルロットからもらった左腕の腕時計を確認すると、現在の時刻は17時22分。今日は千冬姉は家に帰つてこないことを知っていたので、焦つて夕飯の準備をする必要がない。そう考えるとまだ時間が多少ある。

「…夕飯の食材をかうついでに買つて行くか」

そう言つてショッピングモール『レゾナンス』に向かつて歩き始めた。

そんな一夏を例の五人はまだつけていた。正直なところ、こんなにも早く一夏が一人になるとは誰も考えていなかった。12月の夜、イルミネーションでライトアップされた夜の街を好きな人と歩く。そんな夢のような時間がうまくいけば過ごせるかもしれない。専用機組の頭の中では（若干個人差はあるものの）そんな映像が絶賛上映中だった。

（何とか他のやつらを撒けないものか…それにしてもどこへ行く気だ、一夏）

（一夏の動き次第で偶然会つたように装えばうまくいくかも…！）

（一夏のさんの行く先さえわかれば先回りできますのに…！）

（絶対に他のやつら一夏と二人きりになるの狙つてるわよね…あたしもどうしたものかしら）

（あいつめ、携帯電話がマナーモードだな。電話をかけても気づかないとは。嫁が亭主の電話に出ないで何とする）

箒、シャルロット、セシリア、鈴、ラウラ。それぞれの思いと策略が交錯する。そんなものなどどこ吹く風、一夏はまだ人でそれなりに込み合つてる大手の雑貨店に入つていった。

（（（（ここだ！）））））

五人全員この場所がターニングポイントだと思つたらしい。全員一夏が向かいそうなコーナーに行つて待ち伏せする作戦に出た。

当の一夏本人はというと、文房具のコーナーに来ていた。意外と文房具はあると役に立つ。しかも学生なら必然的に使う機会が多いので、プレゼントとしてはそんなに悪くはないだろうと思っていた。それにしても本当にいろんな物がある。ちなみに最近発売されたのは「芯がいらぬホチキス（一気に最大100枚まで！）」、「テープ形修正液型テープ」、「インクなくなるまで絶対に線が途切れないボールペン・5色セット」、「伸び縮みする収納ファイル」、「スタンプタイプのり」、「多機能万年筆」、「食べれるインクペン」……食べれるインク？まあいいか。こつこつ種類が多いと迷う。できるだけ他人が持つてなさそうな、かつユニークなものを選ばなくては。

しばらくして満足げな顔をした一夏が店から出てきた。その左手にはプレゼント用に包んでもらった買物袋が下がっている。そんな様子を専用機組の五人が少し離れていたところで苦々しげに、見ていた。ちなみに箒は冬用小物、セシリアは生活雑貨、鈴はボードゲーム系、シャルロットは革製小物、ラウラはのコーナーにいた。なぜ苦々しげに見ているかというと、待っていたコーナーになかなか一夏が来ないため中央のレジを見たところ、もうすでに目的のものを買い終えた様子の一夏がいた。なので出口付近で声を掛けようとした結果、どうやら全員同じ事を考えていたようで、見事に五人鉢合わせてしまった。こうなってしまうと誰か一人が一夏を誘ったところで他の四人が必ずついてくる事が目に見えていたからである。つまり一夏と二人きりになるチャンスが消滅したためである。

（うーん、一夏だったら絶対このコーナーに来ると思ったんだけどなあ）

（ああもう、今日とはことんついてませんわ）

（一夏め…実はもう私達の存在に気づいてるのではないか…？）

（何でもこういう時は全員の息が合うのかしらねえ…）

（やはり皆考えることは同じか…）

シャルロット、セシリア、箒、鈴、ラウラは歩いてゆく一夏の背中を見ながらそんなことを思っていた。しかし一行にはそれ以上に気になる問題がひとつあった。一夏の左手に下げられているプレゼント用に包装された買い物袋である。

（（（（アレを一体誰に渡すのか…？）））））

その疑問が彼女達の頭の中を支配していた。無論、それがクリスマスパーティー用のものだという思考にたどり着くのは誰もいなかった。

一夏が外に出て時計を確認すると18時過ぎだった。そろそろ夕飯の食材を買って帰るかと思い一夏は歩き始めたが、ふとあるものに目を奪われ、思わず立ち止まってしまった。その視線の先にあったのは――

女子組も一夏が急に立ち止まったのに気づき、近くの立て看板の影に隠れて様子を伺った。今更言うようだが、傍から見た彼女達は完全にストーカーだった。

一行も一夏の視線の先を追う。するとそこにあつたのは12月のみ展示されている、期間限定のウェディングドレスだった。

（――うえうえうえうえウェディングドレスっ！！？？）

（い、い、一夏ってば何をそんなに気にしてるんだろっ！？）

（ま、まさかもうアレを着させる人をお考えに――！？）

（わ、私にあのような服が似合うだろうか…）

（だ、誰に着て欲しいと思っているのだ…）

全員赤面してあらぬ想像に浸っていた。そんな五人をよそに一夏は何だかおかしそうにクスクス笑っていた。

「い、い、一夏め、一体何を笑って――！？」

「ちょ、ちよつと箒！―！そんなに身を乗り出さないで―！」

「うえええっ！―？ちよつと――」

「――っ！―？」

「きゃー！ーっ！！」

立て看板に体重をかけすぎてしまい、見事に前に転倒してしまった。何事かと周りの通行人たちの目が五人に注がれる。

「ちよつと、何やってんのよ！！早く上から退きなさい！！」

「そっとうお前も私の服を引っ張るな」

「い、いいから早く立て……！」

「あれ？何だよ、みんなこんなとこで何してるんだ？」

さすがに気づいたのであろう、一夏がこっちにやってきた。重なりながら倒れていた五人は言い争いをやめ、何か口にしようと口をパクパクしていた。

「い、い、一夏……！その……これはだな……！」

「ちよつとね！？足がもつれて転んじやっただけなんだよ！？」

もつれて転ぶにしても五人まとめてこんな風に転ぶことなんてあるのだろうかと思つた一夏だったが、敢えて言わなかった。

「それにしても五人で出かけてるなんてみんな仲いいのな」

五人が立ち上がったのを見て一夏が言くと、

「いや実は今日は全員でおま……」

とラウラ言いかけたところでラウラ以外の四人の手がラウラの口をふさいだ。

「ま、まあ伊達に専用機持ちの仲間って訳じゃないしね……！」

「そ、そうですねよ！仲間との交流も必要なことですわ……！」

「……？」

何か焦つて言葉をつむいでるような気がするがきつと気のせいだろう。仲間内で親睦を深めるのはいいことだ、うん。

「ところで」

コホンとひとつ咳払いを入れて箒が訊いてきた。

「一夏、その左手にあるのはなんだ？」

「おお、これか？中身はまだ言えないがこれはクリスマス会用のプレゼントだ。まだ買ってなかったから今日出かけたついでに買ったんだ」

「あ」

五人から気の抜けたような声が出る。

「いやー正直な事言つと、今日までクリスマスプレゼントのことをすっかり忘れててさ。もうすぐいろいろ準備しなきゃって思ってた。――ってみんなどうしたんだ？」

「う、ううん！何でもない！」

あわてて笑顔を作るシャルロット。隣では箒とラウラが頬を赤らめながら何かに納得したように頷いている。鈴、セシリアは俯いている。全員、そこまで頭が回らなかったことが少し恥ずかしかったのだった。

「そ、そうだ！一夏、今日みんなどこかで夜ご飯食べない？せっかくだしさ」

「あら、それは良いですわねシャルロットさん」

「そうだな、いつも通りのメンバーでたまには外食というのも悪くはないだろう」

「ふーん、じゃああたしも付き合っわよ」

「嫁が良いというなら私もそうしよう」

うーん、まあたまにはこういうのも悪くないか。そう思いつつ一夏はまだ夕飯の食材を買ってなかったこともあり快諾した。

一行が歩き始めてすぐ、さつき一夏が見ていたウェディングドレスが全員の目に入ってきた。するとラウラが立ち止まったので一夏は声を掛けた。

「どうした、ラウラ」

「さつきこれを見て笑っていたな。何を考えていた」

「ええっ！？」

やばい…さつき一人で笑つてるところを見られたのか？そうになるとだいぶ恥ずかしい。

突然の会話に他の女子も耳を傾けた。

「答えられないのか」

「いや、その、急にだけど千冬姉とかいつかこんな着るのかなあ
と思つてさ。想像もつかないから思わず笑つちまつたんだ」

「ふむ。教官によく言つておこう。一夏が教官のウェディングドレス姿が想像つかないつて笑つていたと」

「お願いですからやめてください」

それこそ命の一つや二つじゃ助からない気がした。
そして再び歩き出そうとした時だった。

「その…なんだ。これを私が着たら似合うと思うか？」

恥ずかしげに言うラウラ。そういわれて想像してみる一夏。

「そうだな…うん、きつとよく似合うと思うぞ」

曇りひとつない笑顔で言う一夏にラウラは照れてしまった。

「い、い、一夏！私も似合いそうかつっ！？」

「ああっ、あたしだつているんだから！」

「わ、わたくしにも似合いますでしようかつっ！？」

「ぼ、ぼ、僕だつて着れると思うんだけどなあ！？」

「ええっ！？」

箒、鈴、セシリア、シャルロットが突然詰め寄つてきたので思わず
たじろいでもったが、まじめに想像してみると、みんなそれぞれ
よく似合いそうだと思った。

「ああ、箒と鈴も、セシリアとシャルも似合うと思うな。みんな結
婚式にはぜひ呼んでくれ——ぐはっっ！？」

言い切る直前で何故か五人の同時手刀攻撃が炸裂した。

「無知というのは恐ろしいな、一夏」

「一夏さんはもう少し将来について考えるべきですわ」

「あんたつて本当はわざとやってんじやないの？」

「以前言つたよね？乙女の純情をもてあそぶ男は馬に蹴られて死ぬ
といいつて」

「私の嫁ともあろうものが何を戯けたことを」

何故かものすごい冷たい目で見られている。あれ、何か悪いこと言
つたんだろつか。何だろっ、ごめんなさい。

一夏が女子達に散々謝つてようやくほとぼりが冷めた頃、六人はレストラン街にいた。

「うーん、どの店が良いかな」

そう言つて歩き出す一夏。女子達はまだウェディングドレスのことをそれぞれ考えていた。しかし考えている事は全員同じだった。

（あ、あれを着るときに――）

（隣にいるのは――）

（絶対に）

（一夏でいてほしいな）

（――決定事項だ）

こうしてそれぞれの思いを心の内に秘めて、五人はついて行く。1
2月の寒空の下、ひときわにぎやかな六人の時間は過ぎてゆく。

紅色のクリスマス(3)

「メリークリスマス!!」

クリスマスツリーやその他さまざまな装飾で綺麗に飾られたリビングに、集まっていた全員の声とクラッカーの音が盛大に響いた。

12月24日。時刻は16時。織斑邸ではクリスマスパーティーが行われていた。…のだが、前回の誕生日同様、リビングは人であふれかえっていた。メンバーは前回の誕生日の時と比べて大して変わっていないが、今回は前回いなかった簪もいる。

「…わ、私来ても…良かったの…?」

「何言ってるんだよ。せっかくの機会なんだから楽しんでてくれよ」リビングで各人がてんやわんやの騒ぎを起こしている中、キッチンで料理をしながら一夏と簪は話していた。ちなみに今作っているのは七面鳥の丸焼き——ロースターキーである。幸いにも小型のオーブンがあったので、こうして家で焼いている。キッチン、リビングにはすでに香ばしい香りが立ち込めていた。

「でも…ただでさえ人が多いのに…」

「気にすんなって。こういう時は大勢で騒いだ方が楽しいだろ?」本当は庭も使ってやりたかったのだが、外では珍しいことに雪が降っていた。昨日から降り始めて今日も降っている。しかも大雪。なので外には雪がだいぶ積もっていた。そういう訳で今回は全員リビングに押し込まざるを得なかったのだった。

「…でも、やっぱり…私がいても…」

「おいおい、そんな事言うなよ。こうしてみんなと過ごす時間があるんだから、それを無駄にすることはないだろ?簪にあいつらみたいにどんちゃん騒ぎしろなんて言うつもりはないし。ただ簪なりに楽しんでいてくれればそれでいいよ」

頬が染まってくっていく簪。やっぱり一夏はまぶしかった。

「それに簪が来てくれて俺も嬉しいぞ」

「——！！」

実際、あんまり他人と関わろうとしなかった簪がこんな催しに来てくれる様になったのは嬉しかった。それにタッグマッチ以降はクラスメートとも話をするようになっていつているらしい。うん、いいことだ。

そう思っていた一夏だった。

そんな一夏を前にして簪はうつむいてしまった。ここまで曇りのない笑顔で『嬉しい』と言われてしまえばドキツとしない訳がなかった。本人は意識していないだろうが、そういうことを言えばいわれた方は舞い上がってしまうのだ。

「あ、あの……」

「ん？」

「あ、ありが……とう……」

「……おう」

最後の方は声が小さかったが、確かにお礼を言われた。なんだか二人とも気恥ずかしい思いをしていた。

「あれあれー？何かずいぶんいい雰囲気じゃない？お二人さーん」
そこに急に楯無が現れ、一夏を後ろから抱きしめた。

「ちよっ…楯無さん！！何やってるんですか！！」

「お…お姉ちゃん…！！」

「ふっふっふ、いくら妹と言えど、抜け駆けは許さないわよー？」

「何アホな事言ってるんですか…！！」

「むう…、おねーさんにそんな事言う子には…こうしてやる！」
そう言つて楯無のくすぐり攻撃が始まる。

「ちよっ…楯無さん、や、やめっ、…うわあああああ！！」

「は、離れてよお、お姉ちゃん…」

簪が抗議しながら楯無を離そうとするが、離れない。そんな様子が他の女子メンバーに当然見つかる。

「ちよっ、楯無先輩！？」

「な、何をしていらっしゃるのですか!？」

「は、は、早く離れなさいよ!!」

「人の嫁に手を出すなあああ!!」

そうして今度はキッチンが大変なことになる。

一夏がくすぐり地獄からようやく開放されたのはそれから五分後。時間にしては短いものだったが、五分後の一夏は呼吸困難一歩手前の状態だった。

18時ちょうど。一同が少し早い夕飯とケーキを食べつくした後、プレゼント交換会が始まった。十四人で輪を作り、真ん中に音楽プレイヤーを置く。曲が流れ始めたらプレゼントを時計回りにまわし始めて、曲が止まったときに持っていたものが自分のものになる。よくある手法だ。

やがて曲が流れ始め、プレゼント交換がスタートした。曲は「ジングルベル」だった。まさにクリスマスという感じの曲だ。

各自で用意したプレゼントが全員の手の上を回る。やはり全員自分が誰のプレゼントを手にするか気になっているようだ。中でも楯無が用意したものが全員の注目を集めていた。丸いシルエットをしたそれは何やら布に包まれていて、大きく、そして重かった。そしてことさら（主に女子の）注目を引いていたのは一夏の包みだった。理由は言うまでも無かった。

「~~~~~」

曲はまだ流れ続けている。

（ああっ、一夏さんの包みが…!くうつ……）

（一夏の包みのところで止まらないかなあ…）

一夏の包みが通り過ぎるたびに女子達の心中は穏やかではなくなっていた。

音楽はまだ止まらない。

やがて一夏のところにも楯無の謎の包みが回ってきた。
(何だこれ重ッ!!楯無さん、一体何を…?)

時間は過ぎてゆく。音楽はまだ止まらない。

――が。

ブツッ。

唐突に音楽が止まった。

「ストーーーーーッブ!!誰か回ってきたのが自分のだって人いる？」

特に反応はない。

「じゃあ早速開いてみよう!!」

楯無の号令で全員が包みを開き始めた。一夏の手元に回ってきたのは緑色の軽い包みだった。そして一番気になった楯無の包みはというと、箒が抱えていた。

そしてあちこちからプレゼントに対する反応の声が上がった。

「オレンジクリスプに紅茶だ!ってことはこれってセシリアの?」

「そうですね!両方とも贈り物としては定番ですけど、イギリス内のそこらあたりで売ってるものとは違いましてよ?」

「絶対これラウラちゃんよね!。サバイバルキットなんて選ぶの」

「い、いらなければ一夏にでも渡せ!そもそもそれは…」

「あら、全然いらなんなんてことは無いわよ?ありがたく使わせていただくわ」

「フ、フン!好きにしろ!…ところでこの多機能レーザーポインターとやら、なかなか良いな…」

「これは…いいネックレスですね…」

「あつ、虚さん…それ俺のです…」

「えっ？そ、そうなの？ありがとう……」
何やらみんな盛り上がった。

そして楯無のプレゼントを手に入れた箒を見てみると——そこにはだるまがあった。

「こっ、これは……！」

目がキラキラ輝いていることから相当気に入ったらしい。

「楯無先輩、ありがとうございます……！」

「あらあらいいのよ、そんなにかしこまらなくて」

まあもらった本人が喜んでいるからいいのだろうが、それにしてもクリスマスプレゼントにだるま……何か間違っている気がする。そう思った一夏だった。

「ところで一夏のプレゼントもらった人って誰？」

鈴が訊く。鈴はハンドタオルをもらったようだった。

「私だよ」

そう言ったのはのほほんさんだった。

「おりむーから文房具いっぱいもらっちゃったー。何かおもしろいね。芯がいらぬいホチキスとかー、新しーボールペンとか。早速使わせてもらうのだよ」

「ああ、ぜひ使ってくれ」

そんな会話を交わす二人を女子達が羨望の眼差しで見つめていた。

「ところで一夏は何をもらったの？」

シャルロットが訊いてきた。

「あ、そうだな、ちよつと待って。……お？これは……」

包みから出てきたのは深い紺色のマフラーだった。

「そ、それは私が用意したマフラーだ」

箒が言った。何やら恥ずかしそうに指を弄んでいる。

「へえ、そうか。んじゃ早速——」

「——！」

一夏はおもむろにマフラーを巻いた。突然の動作に箒は思わずドキッとしたのだった。

「んー、どうかなあ？何か変か？」

「い、いや、全然そんなこと無いぞ！ーうん、よく似合っている」

「そっか。じゃあありがたく使わせてもらうな。ありがとうな、箒」

「あ、ああ…」

今度はそんな会話を交わす二人に全員の注目が集まる。

それを見兼ねたのか、鈴が声を荒げて言った。

「あーもう次いくわよ次！！ボードゲームやるんだから！！」

「うん、いいねえ」

「あー一夏、あれもやろうぜ。TVゲームのリモコン振るやつ」

「ああ、あれか。いいな。蘭もやるか？」

「は、はいっ！！一夏さんがそう言うなら…」

また一段と賑やかになるリビングだった。

「ああーもう、また負けたじゃないっつー！！」

「一夏さん強いですわね」

「いや、みんなただ慣れてないだけだろ」

19時30分過ぎ。一同はゲーム大会で盛り上がっていた。たった今やっていたのはリモコンを使って遊ぶTVゲームで、バスケのフリーシュートの得点を競い合うものだった。普通のTVゲームとは違い、プレイヤーの生身の感覚で遊べるので、普通の人間でも互角以上の勝負になっていてもおかしくないはずなのだが…

結局のところ、一夏に勝つことができたのは今のところ楯無くらいだった。

そうなると、

「…あんた、相手が楯無先輩だから手を抜いている訳じゃないでし

ようね？」

「み、見損なつたよ一夏っ」

などと言われる始末である。その度に弁解してもなかなか誤解は解けない。てんやわんやの騒ぎはまだ続いていた。

その時、不意に玄関のチャイムが鳴った。

「ん、誰だろ。ちよつと俺出てくる」

そう言つて一夏は玄関に向かった。

一夏は玄関を空け、顔だけ外に出してみるが、誰もいなかった。

(…ピンポンダッシュか？一応確認しておくか)

一夏は外に出てみた。もうすでに雪は止んでいたが、雪はしっかり積もっていた。さく、さくと雪を踏みしめる。

一夏は空を見上げた。さつきまで雪を降らせていた空には少し雲の切れ目があり、そこから星の光がちらほら見え隠れしていた。

ゴツッ。

突然、感慨に耽る時間は後頭部に何か冷たく硬い物を当てられたことで打ち切られた。ゾクツとした一夏は後ろを振り返るうとしたが

「——久しぶりだな、織斑一夏」

その声を聞いて直ぐに判った。この声は——織斑マドカだ。そして直感が正しければ後頭部に押し付けられているものは…

「無駄に動くなよ。さもなければ撃つ」

やはり銃だった。一夏は心なしに震えていた。当然冬の寒さとは全く関係ない。

「…何が目的だ」

「道路に出ろ」

「……………」

——完全に油断していた。これまでも二度亡国機業に狙われたのに、クリスマスで浮かれきっていた自分が恨めしかった。しかし、後悔先に立たず。今はこの状況を打破することを考えなければ。

一夏は抵抗することなく家の敷地から外に出た。そして次の瞬間、道路が一瞬謎の光に包まれ——消えた。

「な、何だ今の光は？」

「…これでお前は逃げれない」

押し当てていた銃をおろし、マドカは一夏に向かい合った。右手に銃、左手に謎の機械を持ち、その顔には以前と同じようにうすら笑みが浮かんでいた。

「…？…どういう意味だよ」

「今使用したのはイスラエルで開発された国家最重要機密兵器のひとつ、絶対不可侵領域発生装置——A I T G Eと呼ばれるものだ」
そう言って左手の機械を見せる。何やら小さいモニターがついてい

る。

「半径一キロ以内で指定した領域を人間の意識から排除することができ、領域内と外における全ての通信波、物理的接触を遮断する。そして領域内にいる人間は、指定範囲より外側が認識ができなくなるという代物だ」

「いうことはその指定範囲外とは完全に隔離されたことになる。」

「そんなもんありえる訳が……」

「疑うならば今お前が出てきたところを見てみるがいい」

「そっかわれてみて確かに出てきた家の門があるはずの場所を見返すと――」

「――！」

一面の壁になっていた。さらに周りの家を見回すが――どの家にも入り口らしき場所が無かった。いや、本当はそこにあるのだが、認識できなくなっていた。さすが国家最重要機密兵器。なんてもん作ってやがる。

「……目的は何だ」

「……お前の命をもらう。そして私は――私の存在を確固たるものにする」

「……そうかよ」

以前と同じようにはいかない――もう守られるだけの存在なんて絶対嫌だ。

急すぎる二度目の命を賭けた展開だったが、その決意一つで何とか体の震えを抑えることができた。

「さて、お前が理解したところで――始めようか」

そう言うともド力はIS、サイレント・ゼフィルスを展開した。一夏も白式を展開しようとしたが、思いとどまった。こんな住宅街で戦闘なんかしたら一体どうなるか。一般人を巻き込むわけには絶対にいかなかった。

「……」

そんな一夏を尻目にマド力は突然ライフルを目の前の住宅に放った。

「待つ——！？」

民家に着弾するかと思われたエネルギー弾は、しかし見えない壁が何かに跳ね返り、一夏のほうに飛んできた。ビームが一夏の右腕を掠めた。

「——っ」

（——領域内と外における全ての通信波、物理的接触を遮断する——）

ふとマド力を見る。

「俺は一般人を巻き込みたくは無い」

「……この空間内に居るのは私とお前だけというのは確認済みだ」
そう言つてその顔の笑みがさらに広がる。

（ああなるほど、そういうことか。なら俺も——）

一夏は左手を右腕にはまっているガントレットに当てた。

（……全力で行く——！）

そして叫んだ。

「来い！白式——！」

少しだけ時を遡る。一夏が玄関に向かった後のことだった。

「——！」

専用機持ち組が異変に気づいた。

「これは……！」

楯無が呟く。

「一夏……？」

「楯無先輩……」

「な、何が起きたんですか……？」

その場の空気が一瞬にして変わった。やがて、楯無が口を開いた。

「……たった今、一夏君のコア・ネットワーク情報が消えたの。肝心なのは一夏君がISを潜伏モードに変えたんじゃないくて、コア・ネ

ツトワーク情報自体が消えたってことね」

「つ、つまりどういうことですか？」

ただ事ではないと察知した蘭が急き込んで訊いた。

「一夏君の身に何かが起きたことになるわ」

「！！」

その場にいた全員が息を呑んだ。

「い、一体何が起きたって言うんだ？」

あまり状況を飲み込めてない数馬が言った。

「一夏君は今までに何度か事件に巻き込まれているの。もしかしたらさつき敵に襲われた可能性があるわ」

「でも、玄関に応対に行って帰ってこないだけで、そこまで考える必要があるんですか？」

やっぱり一夏のIS学園での出来事を知らない弾が尋ねた。

「相手は裏の世界のプロよ。彼を狙ってるあるグループなんだけど

——」
IS学園組はそれが「亡国機業」だと察した。

「あいつらの前で一秒でも隙を見せようものなら——確実に死ぬわね」

さらっと言つてのける楯無だったが、さーっとその場の空気が凍りついた。虚が口を開いた。

「でしたら、一夏君を探さない」と

「そうね。みんな、悪いけど一夏君を早急に探して」

そう言われて、全員慌しく家の中を駆けていった。

「…これは一生の不覚だわね…」

楯無もまた、一夏を探すために動き出そうとした。するとすぐに、
「楯無先輩！」

と玄関の方から声がかかった。

織斑家にいた全員が外に出ていた。全員が足跡——これが二人分の足跡だと言うのははっきりと判る——を追い、その先を見つめ

ていた。その先は——壁だった。

「こ、これは一体……!？」

「まさか……神隠しというやつだろうか……？」

口々に驚きの声を漏らす。

「……」

そんな中、楯無は足跡の先の壁に違和感を感じていた。

「……ちよつとみんなにお願いがあるの」

楯無が切り出す。

「この家に入る時に門があつたでしょ？ それを探してちょうだい」
全員この言葉の意図がつかめず、頭に？マークが浮かんでいた。

「いいから早く……!」

「は、はい……!」

珍しく怒鳴った楯無に驚いて全員入り口を探しに行った。

数分後。全員に「入ってきたはずの入り口が無い」ということが伝えられ、誰も彼もが驚きの色を隠せなかった。しかし楯無には思い当たることがあった。

「ど、どういふことですか、楯無先輩？」

「つまりね、私達は今入り口がわからなくなってるの。でも入り口は——」

そう言つて足跡が消えている先の壁を指した。

「——ここにあるの」

「あのー、いまいち理解できないんですけど……」

シャルロットがおずおずと尋ねる。

「そうね、じゃあこうしたら解りやすいかしらね」

そう言つて楯無は地面の雪をすくい、壁の向こう側に投げた。——

——が、雪の塊は見えない壁にぶつかったかのように空中で碎けた。

「……!」

「みんなもう解つたでしょう？ つまり目の前には——」

「結果か何かが張られているということか」

ラウラが引き継いで答えた。

「そういうことになるわね」

ラウラが疑わしげな表情で訊いてきた。

「しかし、人が誤認、いや認識できないほど強力な結界を張れるものなど、聞いたことがないぞ？」

ラウラの知る限りでは、最先端の結界発生装置はシュヴァルツエア・レーゲンにも搭載されているAICだった。

「未確認情報だけど、先日イスラエルの国家最重要機密兵器が強奪されたらしいの。それは結界系の兵器って聞いたわ。強奪の首謀者は『亡国機業』だそうよ」

「亡国機業…！」

IS学園組が息を呑んだ。そうでない三人も今の状況がかなり逼迫したものであることを理解した。

「となると亡国機業がそれを使って一夏を狙ったと？」

「可能性はあるわ。前にサイレント・ゼフィルスのパイロットに襲われてるんだから。でも仮に亡国機業の仕業だとしても、今となつてはどうすることもできないわ…。見事に隙を突かれたわね…」

その時全員が見たのは今までに見たことのない、悔しさと不安がにじみ出た顔をした楯無だった。楯無だけではない。全員、不安な表情を隠すことはできなかった。

（お願い一夏君、無事でいて…！）

（一夏…）

（一夏さん…！）

（一夏っ！）

ただ、一夏の無事を信じて祈ることしかできなかった。

「ぐっ…！」

ドン、と白色のI.Sが地面に叩きつけられ、大きな衝撃が走り、血が飛んだ。一夏の駆る白式はサイレント・ゼフィルスの精密射撃とナイフ、銃剣による近接格闘のコンビネーションによって押されていた。一夏が立ち上がったたん、サイレント・ゼフィルスが銃剣を向けて瞬時加速を使って突進してきた。

一夏は雪片式型で応戦、受け止めるが、瞬時加速の勢いを利用したマドカの左足の蹴りをその身にまともに受けた。

「がっ……!!」

見えない壁に叩きつけられる。体中が痛み、白式の装甲もすでにボロボロだった。

一夏は戦いが増していく中、あることに気づいた。絶対防御が作動していなかったのだ。

（くそっ……どうなってる……？）

この状況に陥ったのは以前ゴーレム？と対峙した時だった。今はあの時と同じように絶対防御阻害の電波が場に生じていた。しかしデーター上ではサイレント・ゼフィルスに絶対防御阻害の機能は搭載されていないはずだった。

「不思議そうな顔をしているな」

「……なに……？」

「さしずめ、絶対防御が作動してないことだろう」

「……お前が仕掛けたのか？」

「私の機体にそんな機能は無い」

「じゃあ一体……」

「知る必要は無い」

そう言って再び通常ビット六機で射撃を仕掛けてきた。

「ぐっ……!!」

ギリギリのところかわすが、偏向射撃によって追撃されてしまう。「ぐあっ!!」

レーザーの集中砲火を受け、ダメージを受ける。血を吐いたその肉体も、機体も限界寸前だった。

（くそっ…、このまま終わってたまるか…！）

エネルギー残量に目をやる。ギリギリ、零落白夜一回分。

（…これに賭ける…！）

四機のスラストの出力を全開にした瞬時加速で爆発的に加速し、右手に零落白夜の光刃を放つ雪片式型を携えてがむしゃらに突っ込んだ。

「うおおおおおおおおお…！！」

「！」

あまりにも猪突猛進なその攻撃に面食らったマドカは、とっさにシールドビットをこちらにも出力全開で放ち、受け止めた。

エネルギー同士がぶつかり合いバチバチという音があたりを劈いた。どちらも引かなかったが、この時初めて白式がサイレント・ゼフィルスを押していた。

「ちっ…！」

やがて痺れを切らしたマドカは六機の通常ビットで背後から一夏を狙撃した。背中を打ち抜かれ、焼けるような痛みに襲われたが、一夏はひるまなかった。

「うらあああああ…！！」

「ぐっ…！」

気合一線、バチンという音を立ててついにシールドビットを破った一夏は、そのまま零落白夜の刃をサイレント・ゼフィルスに突き立てた。

——はずだった。

サイレント・ゼフィルスに光刃が届く瞬間、その光がふっと消えてしまった。

「なっ…！」

驚く一夏の目の前に点滅する「シールドエネルギー残量不足」の表示。まるで死刑宣告でも突きつけているかのようなその表示に、一

夏は初めて「絶望」という言葉の意味を真に理解した気がした。すべてを賭けた一撃は、敵に届く寸前に消えてしまった。

「…終わりだな、織斑一夏」

先程まで余裕がなくなっていたマドカの顔には、今は勝利を確信した笑みが広がっていた。そしてその手に握られた大型ライフルから実弾がゼロ距離で放たれた。

巨大な爆発音があたりに響いた。しかしその爆発音もA I T G Eによって周囲の民家には聞こえなかった。

やがて煙が晴れ、状況が目視できるようになった時、一夏は壁にもたれるようにして倒れていた。すでに白式の装甲は分解され、体の方も動かなかった。ただ目の前に立つ、織斑マドカを見上げることしかできなかった。

「…これでようやく始められる」

「…何を…だよ…?」

息が絶え絶えになりながらも、マドカに訊く一夏。マドカはうすら笑みを浮かべて、答えた。

「復讐」

「…!?!」

「私の狙いは端からお前ごときでは無い。お前を討ち果たすことで、ねえさんは私を追うだろう。お前はそれを仕向けるための一要素にしか過ぎない」

「『ねえさん』…?…まさか…千冬姉が狙いか…!」

マドカの顔に広がる笑みがさらに大きくなる。

「…冥土の土産だ、一つ教えてやろう。絶対防御阻害を行っていたのは——こいつらだ」

夜の闇から二機のI Sが姿を現す。ゴーレム?だった。

「…!?!」

「そういうことだ」

紛れもなく、タッグマッチの時に襲撃してきた機体だった。あの時裏で糸を引いていたのは「亡国機業」だったのか？ 学び舎を破壊し、仲間を傷つけたその機体を見た瞬間、黒い感情が一夏の内に沸き立った。しかし今はそれを向けるだけの力も無い。

「さらばだ、織斑一夏」

「――！」

その時は一瞬だった。マドカの右腕が不意に一夏の胸の上に伸びた。その右手には銀色に輝くナイフが握られていた。

一夏が気づいたときには自分の心臓にナイフが突き立てられていた。灼熱のような激痛が体中に広がる。あまりにも現実味が無い光景だったが、体を焼くような激痛がそれが夢ではないことを告げていた。マドカを見上げた瞬間、目の前が霞み始めた。

「これで私は私だ」

ナイフを抜き取り、そのナイフに付着した血を舐め、一夏の最期を満足げに見るマドカ。刺されたところからは血が溢れた。闇に向かつて歩き去ろうとしたマドカに一夏は氣力を振り絞って声を出した。

「待……………て……………」

しかし今度は口からも血が溢れ、ついに声を出すことも敵わなくなつた。

地面の雪が血に染まってゆく。そんな光景も徐々にブラックアウトしていった。

こんなところで終わりたいくない。このままだと千冬姉が危ない。仲間も傷つけられるかもしれない。だから、止まれよ血。動けよ体！
！――ちくしょう……………、ちくしょう。

力の無い自分が憎い。仲間を傷つける相手が憎い。大切な人を奪おうとする敵が憎い。

右手をマドカが消えていった闇に向かって手を伸ばすが、直ぐに崩れ落ちた。

それを最後に一夏は意識を完全に失った。

どれくらい時間が経過しただろうか。それは数分かもしれないし、何時間だったかも知れない。織斑邸にいた全員、ただ沈黙して状況の変化を待った。

やがて、事は起きた。一夏のISコアネットワークが復活。しかし白式のコアからは非常事態を知らせるサインが放たれていた。

「！」

専用機持ち組は即座にサインが送られている場所へ駆け出した。いつの間にならうか、先程まで見えていなかった織斑家の門が見えるようになっていた。どうやら結界が消えたらしい。

「みんな！どこへ行くの！？」

「おい、急に飛び出したら危ないって……！」

「い、一体何が起きたんですか！？」

状況が把握できない専用機持ち組以外の人間を置いて、楯無、箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ、簪は駆けた。また降りだしてきた雪の夜道の中を駆けていった。

幸い、白式のサインが送られてくる場所はそう遠くなかった。

やがて、サインが発信されている場所へ続くT字路を曲がった時、見えた。人が壁にもたれかかって地面に座りこんでいた。間違いない、一夏だった。だが。

「……！」

まるで悪夢——いや、悪夢であつて欲しい光景だった。壁に背を預けるようにして倒れている彼の周りの地面は血で染まり、その目からは光が消えていた。

そこにいた全員、目の前の光景が信じられなかった。信じたく、無かった。

「い……ち……か……？」

「なん……で……」

「ウ、ウソでしょ……？」

「……うあ……ああっ」

「……いやああああああああああっ……！！！」

悲痛な叫びが夜の闇に響いた。

22時20分頃、とある大型病院。緊急手術が終わり、一夏が集中治療室に運ばれた直後。その治療室の前の廊下にはIS学園組の女子と——事態を聞いて駆けつけてきた織斑千冬と山田真耶がいた。ISについてはもちろん、場合によっては国家重要機密が関わってくるので、IS学園関係者以外の者〓弾、数馬、蘭それに加えて専用機持ち以外の生徒〓本音、虚、黛薫子はこの場にはいなかった。中でも蘭はこの件に関して蚊帳の外扱いされるのを相当嫌がっていたが、千冬の説得、もとい命令を受けたのと、珍しいことに鈴が気を使って「後で一夏の容態に関しては教える」と約束したのを受けてとりあえずのところは引いたのだった。

千冬は無表情で治療室の扉の前で担当医が出てくるのを待ち、真耶はせわしなくあちらこちらを行ったり来たりしていた。他の専用機

持ちはというと、それぞれうつむきながら立っていたり、あるいはやはりあちこち歩き回っていたり、長椅子の背もたれにもたれていたりしていた。当然その場には言葉は無い。ただただ重い空気が立ち込め、一夏の容態経過の報告を待った。

やがて部屋から医師が出てきた。その瞬間、全員顔を上げて医師の言葉を待った。

「…一夏の様子はとうですか？」

千冬が訊いた。その声はいつもと変わらない感じがした。

「…最善を尽くしましたが、状態は良くありません。ただISの機能かどうかは知りませんが、彼の刺し傷に最低限の応急措置となる程度の生体再生が確認されました」

それを聞いて千冬は以前束が言っていたことを思い出した。白騎士——改め白式には生体再生の機能が備わっていると。医師は続ける。

「ただし、現在彼は体内の血液量の約14%を失血している上に、心臓の活動が不完全なため、現在も意識はありません。重篤な状態は今後しばらく続くでしょう。特に今夜が山となるかもしれません」

「——！」

千冬以外の全員が息を呑んだ。千冬は、しかし、顔色一つ変えずに答えた。

「…解りました。最善を尽くしていただき、本当にありがとうございます」

そして医師は治療室に戻っていった。

その場には8人が残された。担当医の許可もあり、今夜は部屋に入りさえしなければ治療室前の小待機室にすることが許された。透明ガラスなので、暖房を入れて扉を閉めていても一夏の治療室の様子を伺うことができた。時折あわただしく医師や看護師が出入りしている。

千冬は部屋の長椅子に足を組んで座っていた。やがて、その目の前に生徒が立ったのでふと目をあげた。

そこには一番前に楯無、後ろに専用機持ちの六人が立っていた。楯無が口を開く。

「——今回の事件を未然に防ぐことができず、本当に申し訳ありませんでした。私達にもっと力があつて、しっかりしていればこんなことには——」

「やめろ」

そう言われて全員若干たじろぐ。千冬が続ける。

「……相手は裏社会のプロ集団だ。未然に察知していたとしても、たかが十五、六、七の小娘に阻止できたかどうか怪しい。だから、気にするな」

全員思わず目を点にした。てっきり烈火のごとく怒られると思っていた一同にとつて千冬からそんな言葉が出てくるとは思っていなかった。むしろ、こんな簡単に許されるくらいなら怒鳴られたり罵倒された方がまだましだとさえ思っていた。

「しかし——」

再び口を開いた楯無を千冬は片手を挙げて制した。

「気にするなといったらう？ もう事態は起きてしまった。今からやらなかったことに対して後悔したところで一夏が復活する訳じゃないんだ。今は一夏の無事を祈ってやってくれ。それに自分が無力だと感じたなら今後の精進を怠らないようにすることだ。それと——」

千冬は微笑んで続けた。

「——事件後の処理を手早くやってくれたことを、一夏の姉として感謝する。もしあいつを見つけるのが数分でも遅かったら、ここに来る前すでに一夏の命は尽きていたかもしれない。本当にありがとう」

そう言つて深々とお辞儀をする千冬。それを見た全員がばつを悪そうにしてうつむいてしまった。

その後も千冬の表情が変わることは無かった。弟の無事をただただ待っているようだった。

しかし時折その手がぎゅっと握られ、少しだけ顔が険しくなるのを見逃さなかった。

（織斑先生…）

真耶も、真耶だけで無くその場にいた全員が理解した。千冬は自分を責めている。守るべき存在を守るべき時にその場に居れなかったこと。それに対して責任を感じていたのだ。そう思うとさつき千冬が述べた感謝の言葉が全員の心にさらに重くのしかかってくるようだった。

（私達は…無力だ…）

（…一夏さんが狙われる可能性くらい予測できたはずなのに）

（大切な人一人守れない…）

（なんて馬鹿なんだろうね、僕達は）

（悔しいのは教官だけじゃない…）

（…私…一夏に何もしてあげられなかった…）

やがて時間が過ぎ、23時を回ったあたりで看護師が入ってきた。

「皆さん、風邪を引いたら大変なので毛布をお持ちしました。どうぞ使ってください」

「ありがとうございます」

そう言って千冬が受け取る。看護師はまた出て行った。

「お前達も今日は疲れたろう。夜も更けてきたことだし、これを纏って寝ればいい。何か様子が変わったらその時起こしてやる」

そう千冬に言われて全員おとなしく従った。千冬も肩から毛布を掛けて椅子に座りなおした。

しかし、やはりこの状況では当然、全員なかなか眠りにつくことができなかった。

日をまたいで午前1時頃のことだった。

突然全員が睡魔に襲われた。それは今までにも体験したことのない強烈なものだった。

「何…これ……」

「あ…れ…ねむ…く…」

みんな口々にぼやきながら急に眠りについていった。

（これは…まさか催眠ガスか……？）

こんなに急に眠気に襲われることは、しかも全員同時に偶然起きるなんてことは、催眠ガスをもってしない限りまず無い。千冬ですら、この眠気に抵抗することに難儀した。

（まさか…「亡国機業」か……？）

だとすれば――

「まずい………」……夏………」

そこまで言って、千冬もまた深い眠りについた。

人気の無い病院の廊下。そこを歩く一人の人物の姿があった。窓から差し込む月明かりに映し出されたその顔には、ガスマスクが装着してあった。その人物の目的地は最初から決められている。ただそこに向かって一切の迷い無く歩いていった。

やがて一室の前で立ち止まる。「特別集中治療室――織斑 一夏様」と書いてある。それを確認して、ガスマスクを装備した人物は部屋に入ってしまった。

部屋の中央には様々な医療器具を繋かれ、一夏がベッドに横たわっていた。当然、誰かが入ってきたことに気づく由も無い。たった今

部屋に入ってきた人物は一夏の傍らに立つと、その顔についていたマスクを外した。

マスクの下から現れた顔は、一夏が良く知っていた顔だった。とはいっても意識を失っている今は特に関係無かったのだが。青と白のワンピース、頭にウサミミを装着したその人は、つい先日たまたま研究所を襲撃されてしまった篠ノ之束だった。

「やーやーいっくん、おひさおひさー」

当然一夏からは返事が無い。

「私のこの前開発した『いっくん探知機』がねー、『いっくんが危機状態にアリ』って言うもんだからびゅーんって飛んできちゃったんだよ。それでねー、病院の人に見つかりと面倒だから少しだけ眠ってもらってまーす。さあさあ、一体どこを怪我しちゃったのかなー？」

そういつて束は一夏の胸のシートをめくった。そこには刺された跡がくつきり残っていた。そして心電図のモニターを見た後、ため息混じりに言った。

「ありやりやりや、いっくん、このままだと死んじやうよ？束さんそんなの寂しいよ。それに残されたちーちゃんも篝ちゃんも悲しんじやうよ？それでいいのかなあ？」

一夏の顔を覗き込む束。一夏の顔は、ただ眠っているかのように安らかだった。

「そーんないっくんに今日は素敵なプレゼントを持ってきたんだよ。だって今日はクリスマスだもんね。束サンのプレゼントだ」
そう言っ取り出したのは黒い菱形立体のクリスタルだった。それは紛れも無くISのコアだった。

「それではこれを――」

そのコアを一夏の刺し傷の上に置いた。

「不完全な状態のいっくんの心臓と融合させまーす」

次の瞬間、黒いISのコアが突如黒い光を放ち始め、気づいたときにはそのコアは一夏の体に溶けるようにして傷口から体内に沈んで

いった。そしてなんと——何事も無かったかのように傷口が完全に消えてしまった。心電図モニターにはついさっきまでは今まさに命が消えかけている人間の数値だったものが、今は通常の健康な人間のものになっていた。

「ふー、どうやら成功したみたいだねっ」

嬉しそうにはしゃぐ束。

「これでいっくんもめでたく全快だ！ たった一つしかない命だもんね、もっと大切にしないと。 ああ、そうそう、一つだけお願いがあるんだよねー」

「……………」

相変わらず、一夏は起きない。それでも束は続ける。

「実はさーこの前束さんのラボが変な人たちにやられちゃったんだよねー。それでさー、その人たちの狙いはたぶん、戦争なんだよね、うん」

うんうんと頷く束。そして無邪気な笑顔で一夏に言った。

「だからもし戦いが起きたその時は、今日あげたやつでがんばって戦ってみてね。 ヨロシクー」

そう言ってくるりと向きを変え、病室の出口に歩いてく。

「あ、ちなみにそのISの名前はね——」

ぴたっと止まって言った。

「『玄式^{げんしき}』、だよ」

気づいたときにはもうすでに束の姿は部屋の中に無かった。

渚

一夏はその身に学園の制服を纏い、砂浜の上に立っていた。

心地よく響く波の音。眩しいほど白い砂浜。どこまでも続く青空と、海。空と海を分けているはずの水平線は、あたかもそのふたつが交ざっているかのように判らなかった。

——この風景を俺は知っている。なんだかとても懐かしい。ここは、どこだっけ？

一夏は辺りを見回した。そうして、ひとつの人影を見つけた。一夏はその人が居る場所、波打ち際へ歩いていった。なぜだかその人がとても気になる。心が落ち着かない。

近づいてみると、その人は少女だった。艶やかな黒い髪、黒いワンピース。その瞳に赤色の光を輝かせ、一夏を見つめていた。まるで、最初から一夏のことを待っていたかのように。

一夏は彼女の直ぐ近くまで近づいた。手を伸ばせば届きそうな距離。そこで二人はぴくりとも動かなくなり、ずっと無言だった。涼しげに波の音が響き、波が二人に打ち寄せる。一夏は飽きもせず、ただただその少女の吸い込まれるような瞳を見つめていた。

どれくらい経っただろうか。それは5分、10分、いや、それは実は1時間、2時間かもしれない。時間という概念が自分の中から消えてしまっている。一夏はそんな気がしていた。

しかし、なぜかひどくむねがざわついた。それは焦りと呼ぶべきものだろうか。一夏は内心落ち着いていられなかった。それでも少女には声を掛けることができなかった。

やがて、少女が口を開いた。

「…あなたは…」

「…うん？」

表情を変えないまま、突然口を開いた少女に若干たじろぐ一夏。そんな一夏のことなど気にも留めず、少女は続ける。

「あなたは…弱い…」

「…」

いきなりその言葉が一夏に突き刺さる。そしてふとこの場所に来る前の事を思い出した。

相手にいたぶられる自分。飛び交うレーザー。軋む体。自分の血。胸に刺さったナイフ。無人機のIS。そして——暗闇に消え去る、織斑マドカ。目の前に広がる黒一色の空間。

——誰かを守りたい。なのにそれだけの力が無い。自分のことすらままならない。そんな自分が恥ずかしかった。悔しかった。憎かった。

そしていざ「弱い」という言葉を突きつけられては何も言い返せなかった。当然だ。事実なんだから。

ふと気づくと少女は手を伸ばして一夏の胸の辺りに触れてきた。それにまたびくつと驚いた一夏だったが、されるがままにした。

「あなたの翼は折れてしまった」

「…」

一夏は答えない。ただ少女の瞳を見据える。

しばらく沈黙が続いたが、やがてまた少女が話し始めた。

「…でもあなたは、戦うことを諦めていない」

それは、そうだ。翼がもげようが、腕が無くなるうが、仲間を守る可能性がカケラほどでもあるのなら、俺はその可能性に賭けたい。どんなにカッコ悪くたっていい。あがいて、もがく。ただひたすらにその可能性を信じて進むだけ。それだけの力が、欲しい。

「…もう一度、飛びたい？」

一瞬間が空いて、一夏は頷いた。

「そう…」

少女は微笑んでうつむいた。心なしか、一夏の胸に押し付けている

掌の力が強くなった気がした。

「…私が翼を…白と共にあり続ける翼を…」

「？　なんだよ、それ…？」

首を捻る一夏。そんな一夏に少女は告げる。

「…初めて見たあなたは空っぽ…まるで人形のように…」

「…？」

一夏は不思議に思いながらも、敢えて何も訊かなかった。

「…でもあなたに触れて解った…心の奥…あなたの本当の姿…」

「本当の姿…」

「…それはしつかりした意思…でもそれを包む殻が…脆い…だから

…」

「…だから？」

そう訊いた次の瞬間、一夏は少女の触れてるところから何か冷たいものが流れてくるのを感じ、思わず目を見開いた。

「…わたしが殻になってあげる…あなたを包む…力」

彼女がそう言った瞬間、辺りの砂浜がかすみ始め、除々に目の前の景色が暗くなっていった。彼女もまた、暗闇に溶け始めた。

「君は…誰…？」

まだ少女が消えないうちに一夏は問いかけた。

少女は顔を上げ、一夏の顔を見て言った。その顔に微笑みを浮かべて。

「…私はあなたの………鏡…」

「…？」

どういうことだよ…それ。そう訊こうとする前に目の前の景色は深い暗闇に溶けて行った。押し寄せる暗闇に身を預け、一夏は今度は下に落ちて行った。その胸の上にはまだ少女の残っていた感触が残っていた。

そうしてまた時間が過ぎ、今度は何かの上に横たわった。

（頭の下にあるのは枕か…？まあ…いいや）

ふかふかした物の上に寝転がるのは、気持ちよかった。なんだか疲れた。このまま寝てしまおう――

――待て。この感じは、ベッドか何かだ。ここで寝てる場合じゃない。俺はマド力にやられた。みんなは――どうなった？

そう考えて一度瞬きをした。すると暗闇が少し晴れた。もう一度瞬きをすると、天井が見えた。

一夏は予想通り、ベッドの上にいた。そして周囲を見回す。自分につながれている機器の数々が目に入り、自分が今病院の一室にいることを理解した。さらにもう一つ、自分が生きていることに気が付いた。

しかしそんなことはどうでも良かった。仲間――千冬姉はどうしたのだろうか。自分の命が助かったことよりも大切な人たちのことの方が気になる人間、それが織斑一夏だった。

一夏は体に力がみなぎっているのを感じた。自分を繋いでいる医療器具などもう必要ない。自らを拘束していた機器を全て自分で外し、ベッドから降りた。その身はよろけることが無く、しっかりと地面を踏みしめていた。

「一夏――！」

一夏が部屋を出ようとした瞬間、ドアが開いて一気に人が押し寄せてきた。開いたドアの向こうには、千冬を先頭にしてIS学園組がいた。

そしてしっかりと立つ一夏の姿を見て、全員驚愕の表情を浮かべていた。

遡ること数分前。待合室で最初に目覚めたのは箒だった。

「……………」

時計を確認すると、12月25日の朝の6時半を回っていた。

（私は…いつの間に…？）

寝てしまったのだろうか。一夏のことを心配で寝られないはずだったのに、気がつけば寝てしまった。辺りを見回すと、全員寝ているようだった。

「一夏は…？」

そう考えた時、不意にいやな予感がした。静か過ぎる。そう思った箒はまずその場に居た全員を起こした。

「みんな、起きてくれ！」

セシリア、シャルロット、鈴、ラウラ、簪、楯無、それに真耶と千冬の肩をゆすって起こした。

寝ぼけて訳のわからない小言を口に出しているのもいたが、千冬だけは目が覚めると急に立ち上がった。

「一夏は…？」

いつもの落ち着きを失った千冬に箒は一瞬たじろぐ。そして直ぐに千冬は待合室を出て行ってしまった。それを追うようにして全員あわててその後を追った。

「一夏！！！」

姉が弟の無事を祈って目の前にある集中治療室の部屋を勢いよく開けたその先には――患者服をきた一夏が、何事も無かったかのようになら立っていた。一夏は目を丸くして何事だと言わんばかりの表情を浮かべていた。しかしそれ以上にIS学園組の方が驚いていた。

「……………」

「……………」

沈黙が空間を支配する。なんとかそれを最初に破ったのは箒だった。

「……………一夏…なのか…？」

「お、おう……………」

何とか返事を返すが、会話が進まない。今度は一夏の方から切り出

した。

「み、みんな無事だったか！いやーホントによかつ——」
ごすつ。

突然、一夏は脳天に千冬姉の強烈な拳骨を食らった。あまりの痛み
に目の前がチカチカしたが無と意識が持っていられるのを阻止し
た。

「——つてえ……な、何するんだよ千冬姉——」
そこまで言つて、今度は胸ぐらを掴まれた。

「この馬鹿者！——人にどれだけ迷惑と心配をかけたと思つてい
る！——」

「いや、ちよつ——ぐえつ」

「お前はいつもこうやつて面倒事を引き起こす！その度に他人をい
ちいち巻き込んでいては周りの身も持たないわ！——」

「あの……ちふ……」

「大体お前は自分の身をどうにもできないくせに仲間を守るだの何
だのとぬかしている！まずそれ以前の問題だと何故——」

「あの、織斑先生？そろそろ離してあげても……」

一夏の胸ぐらを掴んで揺さぶりながら声を荒げている千冬に真耶が
恐る恐る声をかける。

すると我を忘れていたのだろう、はつとして千冬がようやく冷静に
なり、一夏を離れた。

やがてひとつ咳払いを入れて千冬が口を開いた。

「……いいか、お前は特に未熟なくせに自分を犠牲にしようとする節
がある。お前の場合はまず己を鍛え、力を磨いてから『仲間を守る』
とか言うんだな」

「いや、でもあの時は……」

「解つたな」

「……おつ」

千冬姉の剣幕に気圧され、とりあえず頷く。

「……傷はどうした」

「え？」

「傷はどうしたと訊いている」

「あ」

そつえば…それを忘れていた。目覚めたらあまりにも体中に力がみなぎっていたので、すっかり胸の刺し傷のことを忘れていた。

「…お前、まさか自分がどんな状態だったのか覚えてないとか言わんだろうな」

「い、いや！そんな事は——」

「いいから見せろ」

そう言つて千冬は一夏の上着を無理やり開き、胸のシートをはがした。

「ちよつ——」

文句を言おうとした一夏だが、自分の胸元を見て言葉を失つた。千冬も、千冬の行動を見てドキツとした女性陣もまた同じような反応だった。

傷が、無い。何事も無かつたかのようにそこは健全な肌で覆われていた。その場にいた全員がしばらくの間、物音ひとつ立てることがなかった。

やがて千冬が傷口のあつたはずの場所をなぞつて呟いた。

「お前…どういうことだ…？なんとも無いのか？」

「…俺も良くわかんねえ…」

一夏はふとさつきまでのことを思い返した。確か夢を見ていたはずなんだが…どうも俺は夢の内容を覚えていられないらしい。しかし何故だかその夢の内容が重要だった気がしてどこかもどかしくなった。

そこに一夏の担当医が入ってきた。

「ちよつと皆さん！許可が降りるまで入室は禁止したはず——」
そこでしっかりと立っている一夏が目に入る。やはり全員と同じように絶句した。

「き、き、き…君は何をしているんだね？重症を負つた人間が何を

ふらふらと――」

「…それがですね、先生…」

そう言つて一夏は自分の胸元を見せる。

「ば…馬鹿な！…あれだけの傷が癒えるなど現代の医療技術でも不可能なはず…」

少し手をあごに当て考える。そして先程よりは落ち着きを取り戻した医者が言つた。

「…よろしい。とりあえず何があつたのか調べましょう。それと言わせてもらうが、仮に回復していたとしても医療器具を勝手に引っこ抜くのは賢明とは言えない」

「すいません…」

「他の皆さんもここから出てもらおう。さあ、早く！」

急かされてしまった一夏以外の面々は外に退出した。出る最中、千冬は考えていた。

（白式の生体再生でもあそこまでは回復するのは無理だろう…となると…）

千冬はこの病院の警備室に向かった。

「はい……実はこの病院の全員が眠ってしまっていたようで…」
そう話すのはこの病院の院長である。

「…解りました。ありがとうございます」

そして話し相手というのが織斑千冬だった。あれから警備室に向かい、病院の監視カメラのビデオを見せてもらったのだが、どういう訳か（というよりは大体予想通りだったが）午前1時～午前3時の間の映像が無かったのである。警備員の話ではその時病院にいた警備員は3人だったがうち1人はその警備室で眠り、残る2人は巡回中に廊下に倒れて寝ていたという。更に今、院長から聞いたところによれば、夜勤のスタッフが全員その時間帯寝ていたらしい。

自らの体験も含め、あの時間は確実に催眠ガスがこの病院内全域で使われていただろう。最初は「亡国機業」ファントム・タスクの者が一夏にとどめを刺すために行ったのでは、と考えたが、一夏はとどめを刺されるどころか、見事に回復していた。

監視カメラも含め、病院のシステムを掌握でき、かつ一夏に対して好意的かつ現時点世界で最先端の技術を持つ人物——そうなると、千冬にはあの人物しか思い当たらなかった。篠ノ之束である。

「束……」

仮に束だとしても一体何の目的があったのか。嫌な予感しかしないのはきつと気のせいではない。それは先日突然向こうからかかってきた電話の内容からも聞き取れた。

それは先週のことだった。千冬の携帯の着信音が鳴り、ディスプレイを見ると束からだった。

「も〜しも〜し、ひーちゃん？」

「……珍しいな、お前から電話をかけてくるなんて」

「いや〜、実は私ホームレスになっちゃったの　これで本とか書いたら売れそうだよ〜？『天才　ホームレス』とかって名前はどう？」

「じゃあな」

「わ〜、ウソウソ！冗談だから切らないで〜！」

「……それで、用件は何だ？」

「実はホームレスになっちゃったのはホントなんだよ〜う。つい昨日ね、えーと、何だっけなあ？あんどつたすく？っていう人たちに奪われちゃったんだよう」

千冬は今の話を考える。あんどつたすく、「人たち」。あんどつたすく……まさかとは思うが。

「……それは『亡国機業』ファントム・タスクと呼ばれる者たちか？」

「あーそうそう、ソレソレ！ちーちゃんあつたまいいー！」

……。千冬は思わず頭を抱えた。多事多難とはこのことだろうか。

「……一体何があった？」

あまり訊きたくは無かったが、仕方ないので訊いてみた。

「いやー、偶然にもね、向こうの人たちに私のラボがばれちゃってねー。それで攻撃されちゃって、いろいろ盗られちゃった訳なのさ」更に訊きたくは無かったが、やはり仕方なく訊いた。

「一体何を盗られた？」

「えーとね、IS関係のデータ全部と、生活用具と、ISがコアのみのも含めて50機位かな。あ、もちろん未発表のやつだよん」

それを聞いて千冬の気分は奈落の果てへと落ちた。

現在世界にあるISの総数は初夏にできたばかりの紅椿を含めると468機。50機となると、その総数の1/9近くを占める数だ。

国に1機存在するだけで相当な軍事力となるものであるにも関わらず、それが50機。それがあの「亡国機業」の手に渡ったとなれば、大問題どころではない。あいつは世界を滅ぼしたいのだからか。「あ、でもね、もう以前からIS関係のデータはちゃんとバックアップを取ってあるし、一番大事なコアは私が持つてるからだ。いいよ」

「そういう問題ではない」

電話が始まった時と比べたら4段以上トーンの落ちた声で答える千冬。そして2人の間にしばしの沈黙が続く。

「えーとね、実はもう新しいラボも造っちゃったんだ。ホームレスなんてウソついてごめ——」

「...そういう問題ではない!!」

声を荒げて千冬が答えた。

「わー、ごめんごめん！でも大丈夫だよーちゃん。もうすでに、というか最初から手は打ってあるから」

えへへ、と無邪気に笑う東。

会話が長引くほどイライラを募らせる千冬だったが、今の発言を聞いて逆に今度は東から嫌な予感——「悪意」のようなものを感じた。

「…束。お前、一体何をたくらんでいる？」

「いやだなあ、ちーちゃん。私はそんな大悪党じゃないよう。そんなことよりさあ、この前くーちゃんから受け取ったものはどうだった？」

「……………」

「どーなのさー。あれで暮桜が完全に覚醒したと思ったんだけどなあ」

「…ああ。その件では助かった。今更だが、礼を言う」

「えへん、言っただでしょ？私はちーちゃんのためなら24時間フルオープンってさ。それじゃ、またね」

「おい束——」

ブツツと通話が切れ、それっきり携帯電話は沈黙した。

——そして今回の件になる。瀕死の重傷を負った一夏が回復したこの背景に束が関わっていたとして、これも束の計画の内なのだろうか。

（束…。お前は一体何を考えている…？）

千冬は一夏の病室へ向かいながら考えていた。

そして更にもうひとつ差し迫った問題があったことをふと思い出した。織斑マド力のことである。

（あいつがこの話を聞いてどうなるのか…）

「あいつ」とは当然、一夏のことを指していた。一夏がこの話を聞けば最悪、取り乱すどころではないかもしれない。そうならないだけの覚悟が一夏にあるのだろうか。

（……………いや、きっと無いだろう）

唯一の家族を失いたくはなかった。これを話さなければ、何とかその可能性は免れる。あいつはきっと反抗するだろうが、いた仕方ないことだ。これは家族を守るためなのだから——。

今回の事件にマド力が関わっていることをまだ知らない千冬は気がつく、もう一夏の病室の前に着いていた。

「一夏さん、りんごを食べさせてあげましょうか？」

「ちよつとセシリア！何抜け駆けしようとしてんのよ！」

「一夏…欲しい物…ある？」

「あつ、ぼ、僕も手伝うよ！」

「あら、何かあったら楯無おねーさんに頼んでいいのよ？」

「…一夏、夫婦は困難な状況を2人で乗り越えるものだ聞いたぞ」

「まさか幼馴染みの私を忘れてはいまいな？」

「皆さん、あんまり騒がないで…」

賑やかだ。本当にこれでもかって程賑やかだ。一応言っておくがこ
こは個室とはいえ病室だ。そして医者に回復を認められたとはいえ、
一応1日の入院を余儀なくされた人間がいるのだ。一夏はベッドの
上で上半身を起こして目の前の光景を眺めていた。正直、隣の部屋
の他の患者さんにも迷惑がかかるので、静かにしていってくればそ
れでいいのだが…。

「…一夏！！」「…」

一斉に呼ばれて現実に戻された。

「…あーいや、今は本当に何もしてくれなくていいよ。っていうか
みんなここ病院なんだしもう大丈夫——」

「…また襲われたらどうするんだ！！」「…」

さつきからずっとこんな具合である。どうもこの人たちはこういう
時だけ意見が合う。

「大体アンタねー、自分の状況を理解してないわよ」

「一夏君にはお守りが必要ってことね」

「ちよつ…そんなこと——」

一夏は反論しようとするのだが、

「仕方ないだろう、お前が軟弱者なのだから」

「気持ちわかるけどね」

「だいたいこうすることで教官にかかる負担も減るのだ。教官は言

っていたぞ。『お前の姉は、心労が耐えない』と」

ぐあ。そんな風に言われているのか。俺は。

こんな具合で反論すら許されない。確かに弱い自分に原因があるのは解るんだが、こつも全員に断言されてしまうと悲しいものがある。

「一夏さんもたまには誰かに甘えるべきですわ」

「……………」

口添えるセシリアに、無言ではあるものの、力強く頷く簪。

うーむ。そうは言っても俺はもう身体的にも問題ないし、本当の本当に頼むことが無いからなあ…

目の前にいる賑やかな一団を見てそう思っているとところに病室のドアが開き、人が入ってきた。千冬姉だった。

「……お前達は元気だな。それだけ元気なら学園のグラウンド外周をくれてやっても問題なさそうだな」

「いえ……遠慮しておきます……………」

そしてフウとため息をついてから続ける。

「…こいつの心配をしてくれる分にはまだいいが、それで毎回こう騒がれるようでは面倒かつ迷惑なだけだ。お前らもいい加減学習しろ。いつまで子供のままでいるつもりだ」

「べ、別に私達は子供じゃなんか……………」

「私から見ればお前達はまだまだ子供だ。もっと成長しろ。それに

織斑——」

「は、はい!」

突然話を振られ、身構える一夏。

「…さつきも言ったが、お前ももっと強くなれ。お前が『守る』んだろう?その言葉の重みをもっと理解しろ」

「…はい」

「さて、こいつの面倒は明日までは私が見ることにする。お前達にはまた後日連絡することがあるが、今日のところは帰れ」

「で、ですが…」

セシリアが何か言おうとしたが、千冬が自らのオーラをもってして

それを制した。

「…解ったな」

「はい…」

こうして専用機組は帰っていき、部屋には一夏と千冬が残った。

「さて、一夏」

「は、はい」

緊張している一夏を見て千冬はため息をついていった。

「おいおい、今は2人だけだろう。それと、お前の着替えを持ってくる。これ以上トラブルに飛び込むなよ」

「…俺が飛び込むもんか。むしろ向こうから飛び込んでくるんだ」

ぼそつと言った一夏の呟きを聞いてフツと笑い、千冬は出て行った。一人残された部屋で一夏はふと思った。

（そついや、後でちゃんと訊かなきゃな）

マドカのこと。あいつは「復讐する」って言ってた。狙いは千冬姉2人の間に何も無かったわけが無い。千冬姉は絶対何かを隠している。

それを訊かなくてはならないが、いかんせん家族の話となると、千冬姉の態度が固くなる。でも今回はもう黙ってはいられなかった。だって千冬姉の命にだって危険が迫っているのだから――。

やがて千冬が戻ってきた。

「とりあえずその鞆の中に明日の服などが入ってる。確認しておけ」

「……ああ、ありがとう」

「私はもう行くぞ。事後処理やらなにやらが大量にあるのでな」

そう言って出て行くこうとする千冬に一夏が待ったをかけた。

「千冬姉、待ってくれ。訊きたいことがある」

「何だ、手短にな」

今まではオブラートに包むかのような問い方だったが、今回は勇気

を振り絞ってストレートに訊くことにした。

「…織斑、マドカのことなんだけど」

「…！」

一瞬千冬姉の目が見開かれるのをしっかりと見た。そしてやはり気配が変わった。

「もうはつきり言うよ。今回までに二度俺はあいつに襲われたんだ。あいつは言ってた。俺を消すことで千冬姉に復讐を始められるって。それってつまり過去に2人の間に何かあったってことだろ？」

「…」

「今回の事がある以上、俺ももう当事者なんだ。教えてくれよ！あいつは一体何者なんだ？」

しばらく無言になる2人。その場はひたすら息苦しかった。

やがて、千冬が沈黙を破った。

「今はまだ話せない」

それを聞いて思わず一夏は大声を出してしまった。

「じゃあいつ話してくれるのさ!？」

「黙れ」

千冬の放った絶対零度の一言に思わず一夏はひるんでしまった。だが、千冬のその様子から、向こうも少なからず動揺しているのが判った。

「…次にこの話をする時はお前がこの話を聞くに値する強さを身につけた時だ。ただしそれは――」

「物理的な力だけじゃない、だろ…」

「…そうだ。それまでは一切この話をするな」

明らかな拒絶。その目が「お前には話す気は無い」と物語っていた。

「…解った」

そう答えるだけで精一杯だった。

「…話はそれだけか」

「…じゃあ一個だけ。千冬姉も気をつけろよ。俺みたいにいっつ襲われるかなんて解ったもんじゃないから」

「誰に向かって言っている。これでも元世界一だ。自分の身くらい自分で守れる」

お前とは違ってな、と言われた気がした。

「：今度こそ私は出るぞ。一応部屋の外に学園関係者が2名待機しているが、万が一何かあったら連絡しろ」

「ああ、解った」

「ではな」

そう言って千冬姉は出て行った。再び一人残される。

一夏は悔しかった。昨日今日でどれだけ自分は周りから弱いと思われているかを知った。自覚させられた。

強く、なりたかった。強くなることで自分の望むものが手に入るのなら、もっと強くなりたい。いいや、なるんだ。一夏は誰にでもなくそう誓ったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9069w/>

IS-宿命の黒き翼

2011年11月13日11時15分発行